

最近の住宅における軽度な日常災害の実態調査

正会員 ○岩井今朝典*1
直井 英雄*2

【研究概要】

10数年前までは、住宅内で生じている日常災害の実態について相当数の調査報告があった¹⁾。しかし、それ以降、死亡事故などの重大な事故の実態については統計資料から知ることのできる状態であったが、軽度な事故の実態については調査事例が少なく、特に、最近のものはなかった。日常災害の実態は、住宅や家族生活の形態などの影響を受け、時代と共に大きく変化している可能性がある。このような背景のなか、最近の住宅内で生じている軽度な日常災害の実態を調査する機会に恵まれたので、その結果を報告する。

【調査方法】

- (1) 調査方法：郵送によるアンケート調査
- (2) 調査対象：某ハウスメーカーの顧客600人（一戸建て及びマンション居住者）
- (3) 調査の項目：過去に経験した事故（けがには至らなかったものも含む）について、①家族全員の年齢・性別、②事故種類別の事故経験の有無、③事故者の年齢・性別、④事故の具体的な内容

(4) 調査時期：平成6年5月

【調査結果及び考察】

(1) 返送数及び有効回答数

返送数441通、このうち有効回答数437通であった。

(2) 調査対象の偏りについて

家族の人数については、図1を見ると4人家族がもっとも多く、3人家族が小差でこれに続き、さらに2人家族と5人家族がほぼ並んで続いている。このグラフを見るかぎり、調査対象には特に目立った偏りはなさそうである。

次に、図2と図3で調査対象世帯と日本の平均的な世帯の家族構成を比べてみると、調査対象世帯に0~4歳の幼児が若干多いことを除けば、かなり似ている。この点でも、この調査の対象世帯には、大きな偏りはないと考えてよい。また、このことは、当然のことながら、調査対象者の年齢別・性別分布も日本全体の年齢別・性別人口分布とよく似ているということであり、個人の集合としても偏りの少ない調査対象になっていたといえる。なお、年齢別分類は主に厚生省の分類方法に準じた。

(3) 日常災害の発生実態について

図4は、事故種類別に見た事故経験者の数を比べたグラフである。過去の調査結果¹⁾などと比べても、ほぼ予想された発生状況といえてよい。

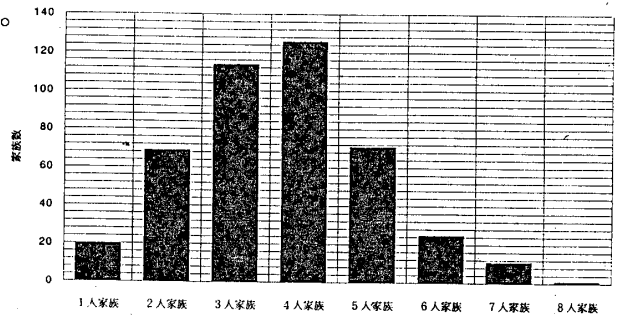


図1 家族人数別の家族数

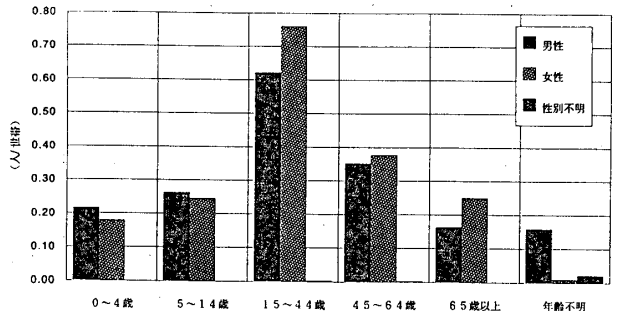


図2 調査対象世帯の平均的な家族構成

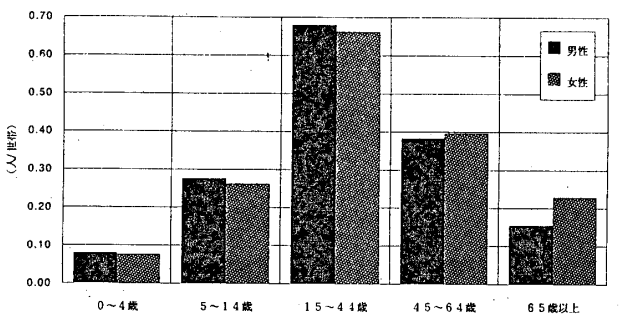


図3 日本全体の世帯の平均的な家族構成

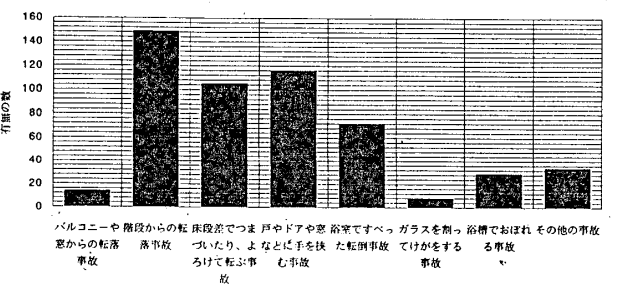


図4 事故種類別に見た事故経験の有無の数

Reserch on non-fatal injuries caused by building related accident in dwelling house

IWAI Kesanori and NAOI Hideo

図5～図9は、事故種類別に、事故経験者の実数を年齢別・性別人数で割って、100人当たりの事故頻度に直したグラフである。これらのグラフを見ると、事故により若干の違いはあるものの、かなり似かよった発生傾向を示している。すなわち、幼児が最も頻度高く事故を起こしており、年齢とともに頻度が下がってくるが、中・高齢者になるにつれて、再び事故頻度が上がってくる。このような傾向は、これまでの調査でも同じようにとらえられており、この調査で取り上げたような軽度な事故では、高齢者の頻度はそれほど高くないが、重・中等傷事故や死亡事故では、幼児を大幅に越えて高くなることが知られている。

図5の「階段からの転落事故」を見ると、上記で述べた典型的な発生傾向を示している。中・高齢者層で、男性より女性の発生頻度が高くなっているが、これには、在宅時間の長さや家事労働などの家庭内での活動量の違いが影響しているのではないかと考えられる。

「床段差による転倒事故」を示した図6も、同じく、典型的な発生傾向である。高齢者層で女性の頻度が高いのも、「階段からの転落事故」と同じ理由であろう。

「戸やドア・窓などに手を挟む事故」を示した図7は、高齢者層の頻度はそう高くないが、やはり典型的な発生傾向といえる。男女差はそう強く出ていない。

「浴室での転倒事故」を示した図8は、典型的な発生傾向で、かつ中・高齢者層で若干女性が多いのも、上記の転落・転倒事故と似ている。

図9に示した「浴室で溺れる事故」は、圧倒的に幼児・子供が多い。但し、これは、溺れそうになった程度の軽度な事故ゆえの傾向であり、死亡事故などでは、他の統計データによれば、高齢者の頻度が圧倒的に高くなっている。

なお、図5～図9に表した事故種類以外の「ガラスを割って怪我をする事故」「バルコニーや窓からの転落事故」については、もともとのデータ数が少ないので省略した。

【まとめ】

調査の結果、今回取り上げたような軽度な事故では、幼児・子供の発生頻度が圧倒的に高く、高齢者の事故頻度を完全に上回っていることが明らかになった。この事実は、高齢化対応のみが強調されがちな、やや一面的な安全対策に修正を迫るものといえる。なお、本研究の調査に際して、三井ホーム(株)技術開発研究所長尾崎一雄氏、三井ホーム(株)総務部次長佐野孝雄氏の協力を得、集計に際しては、大学院生前田哲君の協力を得た。ここに記して謝意を表す。

- 1) これらの調査をまとめた研究として、例えば以下の論文がある。
直井英雄、宇野英隆：日常災害の被害量調査のための前提的事項に関する検討および住宅における被害量の調査・推定 日常災害による人的被害の定量的把握のための調査研究(1)
(日本建築学会計画系論文報告集第429号・1991年11月)

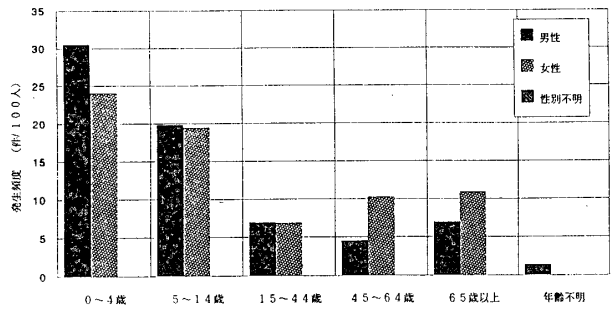


図5 階段からの転落事故の発生頻度

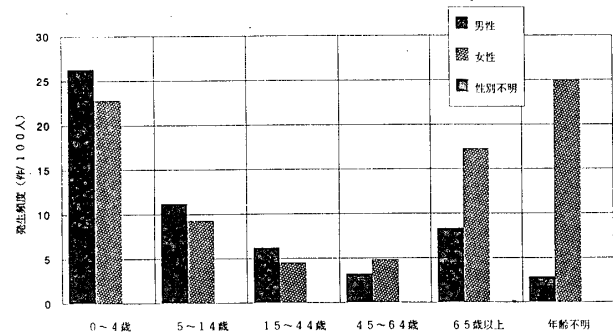


図6 床段差でつまずいたり、よろけたりして転ぶ事故の発生頻度

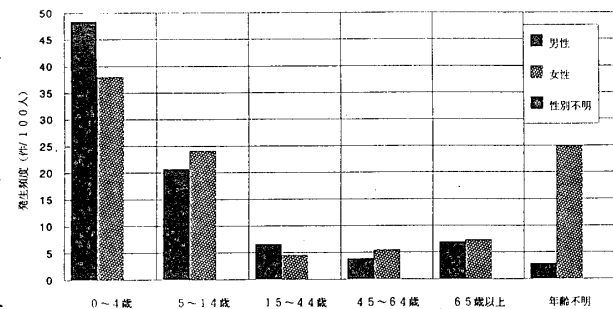


図7 戸やドア・窓などに手を挟む事故の発生頻度

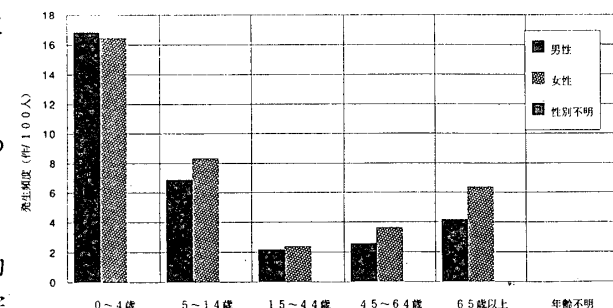


図8 浴室ですべった転倒事故の発生頻度

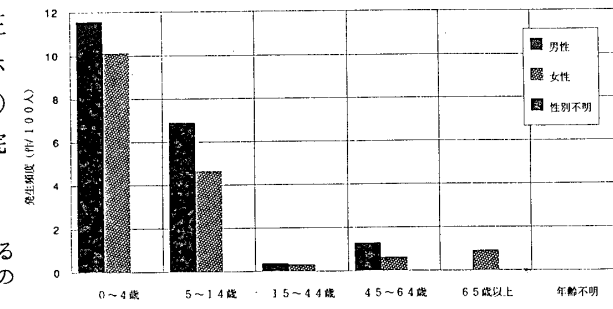


図9 浴槽で溺れる事故の発生頻度

*1 東京理科大学助手

*2 東京理科大学教授・工博

Reserch Assoc., Dept. of architecture, Faculty of Eng., Science Univ. of Tokyo.
Prof., Dept. of architecture, Faculty of Eng., Science Univ. of Tokyo, Dr.Eng.